

# SCARTS 5th ANNIVERSARY PARTY!

## 北日本アートセンター ミーティング

2023年10月7日(土) 16:00~18:00

会場：SCARTSコート

---

### 登壇者

芦立さやか(秋田市文化創造館 ディレクター)

甲斐賢治(せんだいメディアテーク アーティスティック・ディレクター)

慶野結香(公立大学法人青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC] 学芸員)

吉本光宏(合同会社文化commons研究所 代表)

松本桜子(SCARTS スタッフ)

モデレーター：木ノ下智恵子(SCARTS 事業統括ディレクター)



## 美術館や劇場と違う「アートセンター」 SCARTSが次の5年を目指すために

木ノ下智恵子(以下、木ノ下)：本日はPLAZA FESTIVAL 2023 SCARTS開館5周年記念事業、北日本アートセンターミーティングにお越しいただき、ありがとうございます。本日モデレーターを務めます、木ノ下智恵子と申します。一昨年度からSCARTSの事業統括ディレクターを務めています。もともと兵庫県・神戸市の新開地にある神戸アートビレッジセンター(※1)の立ち上げスタッフを務め、現在は大阪大学で教員をし、中之島エリアでアートプロジェクトに携わっています。

さて、本日のテーマ「アートセンター」について、よくご存じという方はどれくらいいらっしゃるでしょうか？実は、美術館は博物館法、劇場は劇場法といった法律で規定された定義があるのですが、アートセンターにはないんですね。ですから分かりにくい…事業に携わる私たちも、そうかもしれません。

そこで、アートセンターとして札幌に生まれ、5歳を迎えたSCARTSがこれから何をすべきなのか、次の5年を目指すためにも、諸先輩方から学ぼうじゃないか!ということで今回のイベントを企画しました。現場スタッフや研究者の方々、皆さんとアートセンターの可能性について考える場になればと思います。

登壇者をご紹介します。せんだいメディアテーク アーティスティック・ディレクターの甲斐賢治さん、秋田市文化創造館ディレクターの芦立さやかさん、青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC]学芸員の慶野結香さん、そして合同会社文化commons研究所代表の吉本光宏さんです。

今日はまずSCARTSを紹介し、各館からのプレゼンテーション、吉本さんからの世界各国のアートセンターについてのレクチャーの後、全員でディスカッションします。まずはSCARTSの松本桜子さん、よろしくお願いします。

※1 1996年にオープンした神戸市の施設。2023年から「新開地アートひろば」と名称変更し、リニューアルオープンした

## 札幌の文化芸術を支え、育てていく SCARTSの1,826日

松本桜子(以下、松本)：SCARTSで文化芸術活動支援事業を担当している、松本桜子と申します。オープン前から現在までの6年間、主に活動支援事業に携わって参りました。2018年10月7日、5年前のまさに今日、札幌市民交流プラザ、そしてSCARTSが誕生しました。SCARTSの1,826日をご紹介します。



札幌市民交流プラザオープンの約10年前、平成19(2007)年に制定された札幌市文化芸術振興条例を機に、文化政策の重点施策の1つとして、札幌の文化芸術施策に対する提言、また様々な文化芸術活動のコーディネート・支援・人材育成・情報や場の提供といった機能を有する文化拠点、つまりアートセンターの設置が札幌で検討され始めました。平成27(2015)年3月に策定された(仮称)市民交流複合施設管理運営基本計画において、札幌の様々な文化資産、

ひと・もの・ことを活かすアートマネジメント人材の育成や相談窓口の設置によるアーティストの活動支援、市民への文化芸術・情報の提供などを通して、札幌の文化芸術を支え、育てていく施設を札幌のアートセンターとして位置づけ、SCARTSが生まれました。

平成30(2018)年10月にオープンした札幌市民交流プラザは、「良質かつ多彩な文化芸術の提供と北海道発の文化芸術の創造」「文化芸術の水準を高める拠点としての役割」「今後の文化芸術を担い、支える人材の育成」「すべての人が文化芸術を享受できる開かれた施設」「あらゆる人々がつながり、交流するにぎわいの空間」「安全・安心・快適な施設環境の提供」という6つを、札幌文化芸術劇場 hitaru と SCARTS 双方のミッションとして、事業及び施設運営に取り組んでいます。

札幌市民交流プラザのミッション	SCARTSのミッション
<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 良質かつ多彩な文化芸術の提供と 北海道発の文化芸術の創造</li> <li>▶ 文化芸術の水準を高める拠点としての役割</li> <li>▶ 今後の文化芸術を担い、支える人材の育成</li> <li>▶ すべての人々が文化芸術を享受できる開かれた施設</li> <li>▶ あらゆる人々がつながり、交流するにぎわいの空間</li> <li>▶ 安全・安心・快適な施設環境の提供</li> </ul>	<p>ひと・もの・ことをつなぐ。 創造性の光をむすぶ。</p> <p>一人ひとりの創造性をささえる あたらしい表現の可能性をひらく</p> <p>すべての人に開かれた アートとの出会いをつくる</p>

スライドより抜粋

加えて、オープン直後からSCARTSは「一人ひとりの創造性をささえる」「あたらしい表現の可能性をひらく」「すべての人に開かれたアートとの出会いをつくる」という3つの独自のミッションを設定し、様々な事業を行ってきました。

現在、次のような事業を行っています。

まず、「一人ひとりの創造性をささえる」というミッションに基づく活動支援事業です。アーティストや文化団体など文化芸術に携わる方の、助成金や活動場所、広報手段など日々の活動における困りごとの解決に向け、SCARTSスタッフが一緒に考える「SCARTS相談サービス」のほか、問い合わせ対応や市内の文化芸術に関するイベントチラシの受け取りなどを行う「インフォメーションカウンター」の設置、さらに、常駐するテクニカルスタッフによる施設利用サポート、調査研究など文化芸術活動を行う方々を日常的にサポートできる体制を作っています。

令和3(2021)年度からはSCARTS文化芸術振興助成金交付事業をスタートさせ、これまで34件の活動に助成金を交付しました。これは、活動に係る費用の一部を支援することによって、札幌の文化芸術活動がさらに

発展することを目指すサポートの形です。また、SCARTSの施設特性を生かし、市民の企画を実現し貸館利用の促進にもつなげる取り組みとして「企画公募事業」を毎年行うほか、一般公募による市民チーム「SCARTSアートコミュニケーター『ひらく』」による、対話による鑑賞サポートなども昨年度まで行ってきました。

2つ目が、「あたらしい表現の可能性をひらく」というミッションに紐づいて行う事業、SCARTS主催のイベントやプロジェクト等の事業です。

5年前のオープン時には、堀尾幸男さんの舞台美術展を行いましたし、その後はSCARTSの全施設を活用してアーティスト・鈴木康広さんの個展も開催。また、札幌市が加盟するユネスコ創造都市ネットワーク(※2)メディアアーツ都市の取り組みの1つとして、研究機関やアーティストとの連携によってメディアアートを軸とした領域横断的な展覧会やワークショップも行っています。

そのほかにも、大通駅からこの札幌市民交流プラザにつながる「西2丁目地下歩道」にある上映スクリーンを活用した映像制作プロジェクトに加え、プラザ開館日を祝うPLAZA FESTIVALでの搬入プロジェクトなど、毎年様々な企画を行っております。

3つ目は「すべての人に開かれたアートとの出会いをつくる」ための連携事業です。札幌市内の文化施設や組織と連携し、多様な催しを開催してきました。連携協定を結ぶ道内の大学で学ぶ若手音楽家に発表の機会を提供するとともに、市民の方に気軽に音楽に触れていただく機会として「大学連携コンサート」を行うほか、今日もSCARTSモールで開催されているMORIHICO. プロデュースによるマルシェなどを行っております。



スライドより抜粋

このように、プラザ全体のミッションとSCARTSのミッションに基づいて事業を構築する中で、中長期的の視点を持って取り組む「調査研究」をベースに、年間を通して市民の文化芸術活動をサポートする事業を展開し、鑑賞者だけではなく、担い手を育成することにも取り組んでいます。

これらは地道な取り組みですが、北海道発の文化芸術を創造・発信するという循環を作ることを念頭に置き、積み重ねることで、この5年間多様な事業を実施してきました。作品を鑑賞する場所という従来の文化施設とは違い、市民や他分野との連携・協働を通じて創造したものを発信する「クリエイティブハブ」として札幌に欠かせない場所になるとともに、中間支援・カウンスルの機能を備えたアートセンターとして、文化芸術活動を行う方へのサポート体制をより強化し、多角的に札幌の文化芸術を支えるための拠点として、SCARTSがこの札幌で根付いていくことを目指していきたいと考えています。



以上がSCARTSの5年間の歩みです。ご清聴ありがとうございます。

木ノ下：それでは早速、各館のプレゼンテーションに入ります。まずはせんだいメディアテークの甲斐さん、お願いします。せんだいメディアテークは、SCARTSと同じように都会のど真ん中、街中に位置するアートセンターの大先輩です。

※2 創造的・文化的な産業の育成、強化によって都市の活性化を目指す世界の都市が国際的な連携・相互交流を行うことを支援するため、2004年にユネスコが創設したネットワーク。現在の加盟数は世界295都市で、札幌市は2013年にメディアアーツ分野で加盟した

## 「最先端のサービス(精神)を提供する」 せんだいメディアテークの挑戦と成果

甲斐賢治(以下、甲斐)：よろしくお願ひします、メディアテークの甲斐と申します。「施設概要」「ミッション」「特徴」「市民との接点」という4つのお題をいただいていますので、順にお伝えします。

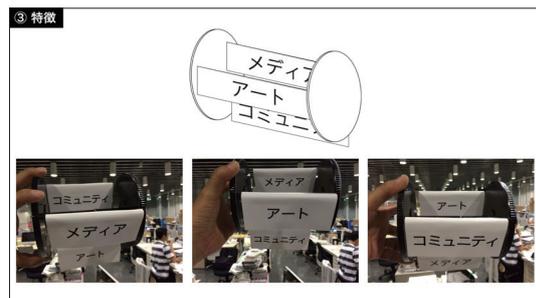
まず建物です。せんだいメディアテークは地上7階建てのガラス張り。2001年、仙台市メディアテーク条例に基づいて建てられた、市の生涯学習施設です。教育局下にあり、博物館や美術館ではないんです。条例は「様々な記録媒体による情報を収集し、保管し、及び提供して…」というところから始まっており、今現在デジタルアーカイブに力を入れています。設計は著名な伊東豊雄さん(※3)。世界に1つしかない構造のユニークな建物なので、今でも国内外からの視察が絶えません。



3・4階に仙台市直営の市民図書館があり、5・6階にギャラリー、7階にシアターやスタジオがあります。6階ギャラリーは、いわゆるホワイト・キューブではなく、可動パネルで仕切る特殊空間です。ギャラリーは市民が利用でき、90%を超える稼働率で展覧会などが日々行われています。

次に「ミッション」に入ります。これまた特殊でして、僕の理解ですが、「ハコモノ行政」などと公共施設の建設が擲擧された1990年代以降の時代背景を受け、色々な人が関わるプロジェクトチームが建設途中で立ち上がりました。3つのコンセプト(理念)は、現在東京藝術大学におられる桂英史さん(※4)が考えたものです。

1つ目が「せんだいメディアテークは最先端のサービス(精神)を提供する」です。…何を言ってるのかわからないんですけど(笑)、解説として「メディアテークにとっての『最先端』とは、『提供する側』と『提供される側』といった立場を常に反転させていながら、メディアテークを成長させていこうとする精神です」とあります。これがとても面白くて、僕は大変気に入っており、これを基に事業を進めたりしています。



スライドより抜粋 ©sendai mediatheque

あと2つが「せんだいメディアテークは端末(ターミナル)ではなく節点(ノード)である」と「せんだいメディアテークはあらゆる障壁(バリア)から自由である」です。…この「障壁(バリア)から自由である」が、めちゃくちゃ大変です。ヘビー過ぎて、僕らも担いきれない現実がありますが、何とかやっつけていこうとしています。

立ち上げに携わった市の職員、学芸員であった前副館長はこうおっしゃっていました。

「ここはメディアセンターであり、アートセンターであり、コミュニティセンターである」。…確かにその通りで、「メディア」「アート」「コミュニティ」の絡みが難しく、運用上苦しんではいますが、とても大事なことであり、同時に進めています。

次に「市民との接点」である事業です。2012年に写真家・志賀理江子さんの個展「螺旋海岸」と、2016年の畠山直哉さんの写真展「まっぶたつの風景」を開催しました。

こうした展覧会とは別に、東日本大震災をきっかけに始まったのが、「3がつ11にちをわすれないためにセンター」です。これは市民や専門家、アーティスト、スタッフが協働し、震災の復旧・復興のプロセスを独自に記録・発信するためのプラットフォームです。2019年からは「わすれん！録音小屋」も始めました。これは2人組が小屋に入り、今聞けること・語れることを聞き手と語り手になって録音する取り組みで、色々な人が使ってくれています。



関連して「記録と想起 イメージの家を歩く」という資料展示も2014年度に行いました。ドアを開けると台所やベッドルームなど20以上のスペースにつながり、各スペースのモニターに震災にまつわる映像やスライドショーが流れる仕組みです。なぜこのような構成にしたかと言えば、「震災の記憶を壁に並べても、しんどくて見れないよね。どうしたら見れる状況になるだろう?」と、メディアの扱い方を考えるべき立場から作った展覧会です。

市民グループが企画を持ち込み、私たちと一緒にガイドして展覧会が生まれることもあります。

たとえば、宮城県の「細倉」という釜山町を記録した寺崎英子さん(※5)という方が残した写真アーカイブを展示したもの。彼女は亡くなりましたが、別の写真家さんが資料を整理し、先日書籍にもなりました。このほか、民話グループやLGBTの当事者グループと展示を行ったこともあります。

「どこコレ?」も、大好評の企画です。これは、博物館などが所蔵し、撮影地や撮影年が不明になった町の近代の写真を、市民が調べるといえるものです。毎回多くの方が、謎解きのように楽しみながら調べた内容をメモしてくださいませ。



スライドより抜粋 ©sendai mediatheque

「考えるテーブル」は、人が集い、語り合いながら、震災復興や地域社会、表現活動について考えていく対話のための場、いわゆる「てつがくカフェ」です。震災前から市民グループと様々なテーマで開催し続け、80回以上を数えました。

また、アーティストが仙台・東北をリサーチし、同時代性のある現代アート作品を制作、さまざまなプロジェクトを展開する「せんだい・アート・ノード・プロジェクト」という事業を2016年度から行っています。スライドは、東日本大震災の津波で被災した仙台市の貞山運河です。民間の橋が流されてしまったその場所に、川俣正さん(※6)と7年間通いまして、去年、仮設の船橋《みんなの橋(テンポラリー)》を作りました。常設ではないのですが、11年5ヶ月ぶりに地元住民の方が歩いて貞山運河を渡る機会となりました。

このほか、藤浩志さん(※7)と展開する「ワケあり雑がみ部」も、老若男女に大人気です。仙台市の環境事業局から「リサイクルできる雑がみにまつわることで何かできないか」と依頼を受けたのがきっかけで始まった、市民参加型の部活動ですね。参加者が雑がみで延々工作するという(笑)。メディアテークの中に「雑がみ収集所」という回収所を設けています。

というわけで、20周年を機に、これらの事業を通して出会い、またこれから出会いたい50人の方々のアイデアや考え方を、書籍『つくる〈公共〉50のコンセプト』(岩波書店)にまとめましたので、ご関心ある方はどうぞご参考ください。

木ノ下：ありがとうございます。とても多様な20年以上…23年目ですか。大先輩の活動を拝見させていただきました。次に、秋田市文化創造館の芦立さん、お願いします。ここは開館3年目で、SCARTSと同じく後発のアートセンターでありながら、多様な活動をしておられます。

- ※3 1941年、京城市(現・ソウル市)生まれの建築家。“建築界のノーベル賞”とされるプリツカー賞を2013年に受賞
- ※4 1959年、長崎県生まれのメディア論研究者
- ※5 1941年、旧満州生まれ。終戦後、宮城県鶯沢町細倉(現・栗原市)に家族と移住。幼少期にカリエスを患い、闘病後、家業の八百屋を經理の仕事で支えた。鉱山の閉山発表直後から、町や人々を撮り始め、371本のフィルムを残す。2016年に逝去
- ※6 1953年、北海道三笠市出身。フランスを拠点に活躍する国際的アーティスト
- ※7 不要物を利用した作品やシステムづくりで知られるアーティスト。秋田公立美術大学大学院教授、NPO法人アーツセンターあきた理事長、秋田市文化創造館前館長

## 市民のクリエイティビティを応援 秋田市文化創造館の試み

芦立さやか(以下、芦立)：秋田市文化創造館ディレクターを務める芦立と申します。よろしくお願いします。開館3年目ではあるんですけど、1967年に開館した秋田県立美術館をリノベーションしているので、建物としては一番先輩かもしれません。

まずは、秋田市について紹介させてください。人口は約30万人、高齢化率は非常に進んでいて31.2%。秋田県は無形民俗文化財の数が日本で、秋田竿燈(かんとう)まつり、なまはげ、かまくらといった様々なお祭りが各地に根深く伝わっています。農村で成り立つ地域でもあり、食料自給率は全国2位。一方、寛容性総合指標(※8)は全国46位と低く、保守的な面が否めません。それゆえに、古くからの伝統文化が守られてきたといえるかもしれません。そうした中、「秋田の面白いものをもっと見つけたい。」という思いがあります。

秋田市文化創造館は、秋田駅から徒歩10分未満の場所にあります。ちょうどSCARTSと札幌駅と同じような距離感です。2013年に移転した秋田県立美術館や秋田市立千秋美術館が周囲にあり、にぎわい交流館、アトリオンといった文化施設、図書館や歴史資料館も近くにあります。秋田市文化創造館のすぐ隣には、県と市が共同で整備した多目的のホール「あきた芸術劇場 ミルハス」もあります。秋田市ではこの一帯を芸術文化ゾーンと銘打ち、駅前周辺のにぎわいを文化で作ろうという施策を進めています。SCARTSは図書館や劇場が内包されたビルの中にありますが、秋田市文化創造館の場合は、建物がいくつか街に広がっているイメージです。



スライドより抜粋

先ほど申し上げた通り、もとは県立美術館だった築60年ほどの建物を活用していますが、それは洋画家・藤田嗣治さん(※9)の20m超の巨大壁画「秋田の行事」を展示するために設計された、非常に素晴らしい、贅沢な空間でした。

2013年、県立美術館が老朽化で移転することになり、駐車場という案も出る中、非常に独特な場所であり、市民の思い入れも強かったので、「活用できないか」という声が起こりました。そうして、秋田県から建物を譲り受けた秋田市が、市民ワークショップなどを経て、開館したのが2021年3月。県民ギャラリーだった1階は、窓を全体的に施し、明るい空間に。周囲との行き来を意識させる、入りやすい内装に生まれ変わりました。



そこで私たちが取り組んでいるのは、まずはこの空間を使ってもらうこと。すべての人に開かれ、様々な想像力と出会ったり、刺激を受けたりする機会を作ること。また、SCARTSと同じく創造支援、つまり、市民活動を支援する事業に取り組んでいます。

というのも、建物の活用に関する市民ワークショップの中で、「秋田市にとって必要なのは、未来のために、何か新しいものを作る姿勢や拠点ではないか」という声がありました。さらに言えば、アートを鑑賞する、アーティストのための場所ではなく、市民のための施設として立ち上げることが必要だったということです。ですから今日、私はアートセンターと呼ばれましたが、実は、秋田市文化創造館は「アートセンター」とは言っておりません。広報文やイベントチラシにも「アート」という言葉を意識的になるべく記載していません。

1階は施設利用ができ、昨年度は主催事業も含めて年間546件の利用がありました。コンベンション級の全館を使うような大イベントもあれば、個人レベルの小さな営みも多く、それが秋田市文化創造館の特徴といえます。また、1階は7つのエリアに分けて利用できます。けれど、壁がないので、展覧会やワークショップなど、隣でやっていることが丸見え(笑)な状況が起きています。キッチンもあるので、料理ワークショップの横で、ハロウィンイベントに向けて妖怪の仮面を作るワークショップが開かれたりしています(笑)。利用がない時は、休憩所として自由開放しているので、勉強する高校生の姿もよく見られます。色々な事業が、ゆるやかに交わる状況が、常に起きています。

個室で会議やイベントを行うことに慣れていた市民は、この開放された空間にギョッとし、戸惑う方もいらっしゃるんですけど、コーディネータースタッフが丁寧に調整して、この状況を無理なくできるように生み出しています。市民の皆さんの「やりたい」気持ちを受け入れ、どう生かし、どう共存して実現させられるのか、コーディネーターが日々特訓させられているわけです。すると結果的に、秋田市文化創造館には、たくさんの意見や相談が寄せられ、情報のハブとなってきています。「施設を利用したい」という方もいれば、「何かやってみたい」「一緒に活動する仲間が欲しい!」「今の活動に新しいことを取り入れたいけれど、どうしよう?」「秋田をもっと良いまちにしたい」といった様々なフェーズの声が、常に寄せられます。そうした声を展開させ、つなげ、循環させたいと、私たちは考えています。

そうして生まれた事業の1つが、“「やってみたい」を小さく試す《カタルバー》”です。これは、旧県立美術館時代にチケットカウンターだった場所が、バーのような良い感じの雰囲気です。「何か小さいイベントができないか」という意見から始まった、参加無料の事業。「1日店主」を募集したところ、多い時には月10件程度の申し込みがあります。「ひやくまでいきる!をはなそう!」「恋愛に興味がない人の恋バナ会」といった哲学カフェ的な内容もあれば、カブトムシを育てるのが趣味の方から「誰かに譲りたい」と相談されて行った「カブトムシを飼育しよう(\*・ω・\*)グッ」など、内容は多種多様です。

また他の事業では、「高齢化などで家の庭先に放置された柿がもったいない」という声を受け、収穫して保存食を作ってみよう!という提案を企画化したこともあります。「お化けになって盆踊り大会をやりたい」という市民の声を受け、盆踊りを行う市民サークルをつなぎ、「であえ!百鬼夜行盆踊り大会」というイベントを共催として実施したりもしました。



スライドより抜粋

そういえば、言い忘れていました。秋田市文化創造館は、1平米・1時間、なんと、5円で使える場所があるんです!館内のスキマを利用し、非常に安く、小さく試すことができるのが、最大の特徴といえます。このルールを面白がってくださった方が「1平米でなにしよう?」と個人的にプロジェクトを立ち上げてくださったりもしています。市民がもともと持つクリエイティビティを発揮できる場所になること、それがどんどん蓄積されることを、私たちは期待しています。市民の皆さんの営みや工夫、思いを受け入れられる場でありたいと思っています。

木ノ下:ありがとうございます。アートセンターではないものの、アートセンター的な試みをなさっているプレゼンテーション、勉強になりました。秋田市文化創造館さんは秋田公立美術大学と関連する豊かな活動もされており、その一方でこうしたミニマムな活動にも取り組まれているということですね。続いて、[ACAC]の慶野さんです。

※8 FULL HOME'S 総研「地方創生のファクターX」より

※9 1886-1968。パリで活躍した洋画家。秋田市生まれの美術品蒐集家・平野政吉と1934年に出会い、2年後、藤田の妻・マドレーヌの死をきっかけに、秋田にマドレーヌ鎮魂の美術館を建設することを合意。1937年、平野がアトリエとして提供した米蔵で《秋田の行事》を制作した

## アーティスト・イン・レジデンスで 青森独自の芸術を生み出すACAC

慶野結香(以下、慶野):青森市にある青森公立大学 国際芸術センター青森、英語だとAomori Contemporary Art Centre(略してACAC)の学芸員、慶野結香と申します。よろしく申し上げます。

ACACは、SCARTSやせんだいメディアテーク、秋田市文化創造館とロケーションからして異なり、まちの中ではなく山の中にあります(笑)。八甲田山の麓に位置し、東京ドーム約7個分の敷地面積を誇ります。複合的なアートセンターというより、アーティスト・イン・レジデンスプログラム(以下、AIR)、つまり、国内外のアーティストに来てもらい、地域住民や学生と一緒に活動し、新しい芸術文化を創造することを目指す施設です。



青森駅からはバスで約40分、青森市の南側にあります。ご存じの通り、青森市は世界有数の積雪量を誇りますが、ACACがある場所は街中心部より1mくらい雪深いんです。ですから、冬場に展覧会を開催しても、なかなか人は来にくい(笑)。でも、だからこそ、アーティストが豊かな自然の中で落ち着いて滞在制作を行い、新たなインスピレーションを受けられる環境だといえます。

設計は安藤忠雄さん(※10)で、コンセプトは「見えない建築」。円形で、来訪者が来やすい開けた環境にある展示棟、そして徒歩数分離れた森の中の谷間にかかるように創作棟と宿泊棟があり、見る場所と創る場所のゾーニングがされています。展覧会のない時期もワークショップやイベントを行うほか、敷地内には22点ほどの野外作品が点在し、野外彫刻公園のように楽しめます。スライドの写真は、青木野枝さん(※11)の野外彫刻《雲谷-1》です。



スライドより抜粋

施設の特徴ですが、展示棟には、弧を描く全長約60m、高さ6mの巨大ギャラリーがあります。これはレジデンス施設の中でも大きめのギャラリーで、543平米。このほか個展向きのギャラリー、AVルーム、アリーナのような野外ステージ、水が溜まっている上に舞台を立ててパフォーマンスなどができる「水のテラス」があります。トークショーを行ったり、芸術文化系の書籍を自由に閲覧できたりするラウンジも備えています。

展示棟から徒歩3、4分の場所にある創作棟は、約100mの長さがある巨大施設です。木工スタジオ、ワークショップスタジオ、銅版画スタジオがあります。青森市は、棟方志功さん(※12)や関野準一郎さん(※13)といった版画家を多数輩出していることや、「版画のまち」として文化政策に取り組んで来たこともあり、世界最大級の銅版画プレス機があるんです。写真スタジオや講義室もあります。ワークショップスタジオは、アーティストが複数名滞在すると共用アトリエになるので、ここで互いの創作活動を目にしたたり、話したりする交流の場にもなります。



宿泊棟はシングルルーム8室、ご家族やお子さん連れ向けにツインルーム2室。共同キッチンもあり、ボランティアであるサポーターがアーティストと食事したり、アーティスト同士が交流したりする場になります。「見えない建築」がコンセプトなので、この宿泊棟の建物の上には土が敷かれ、飛んできた種が定着し、一部は畑やコミュニティガーデンのように使用されています。

こうしたACACの各施設は、AIR事業などで使う時以外、地元アーティストや創作活動を行う市民に有料で貸し出しています。たとえば、銅版画スタジオを地元の版画家の方々が利用されたり、木工スタジオを日曜大工で使う方がいたり。最近では、白バックで撮影できる講義室がコスプレイヤーの方に喜ばれています。

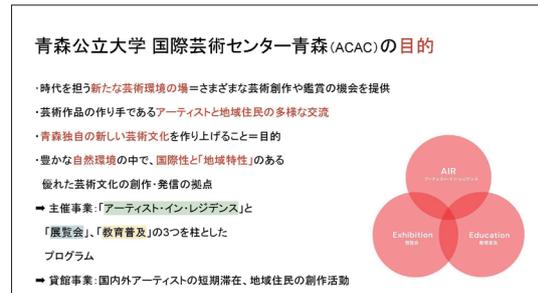
ACACの沿革です。1999年に青森市が市制100周年記念事業の一環として、市直営で「青森市芸術創作工房(仮)」の開設計画を始めました。初代館長は青森市出身の浜田剛爾さん(※14)。浜田さんご自身が1970年代からの世界各地のAIRに参加された知見を生かした施設になっています。

せんだいメディアテークと同じ2001年、ACACは青森市の芸術文化拠点施設として開館しました。翌年5月から指名型と公募型、2通りのパターンでAIR事業を開始。2009年、隣接する青森公立大学の独立行政法人化

に伴い、公立大学法人へ移行しました。この公立大学は経済経営学部のみ単科大学なのですが、当時の館長・浜田さんや市民の意向を受け、「芸術系の学部もいざれできるといいね」という思いもあり、教育機関と一緒にするという決断に至りました。それ以来ACACは大学図書館と同じような立ち位置になり、2015年以降は大学理事長が館長を兼ねています。2021年12月、開館20周年を迎えました。

開館から20年間、ACACがずっと掲げるのは「時代を担う新たな芸術環境の場＝さまざまな芸術創作や鑑賞の機会を提供」「芸術作品の作り手であるアーティストと地域住民の多様な交流」。そして、国内外のアーティストに来ていただくことで、「青森独自の新しい芸術文化を作り上げること」。また、豊かな自然環境の中で国際性と地域特性のある優れた芸術文化の創作・発信拠点となることを目指しています。

主催事業の中心は、AIRです。その成果を広く見ていただく展覧会、さらに、芸術鑑賞のすそ野を広げる教育普及の3つを柱としたプログラムを展開しています。施設は大きいのですが、学芸員は私を含めて3人、技術員1人、事務2、3人。かなりコンパクトなインスティテュション(機関)のため、主催事業で手一杯な面もありますが、国内外アーティストの短期滞在の受け入れ、地域住民の創作活動も支援しています。



スライドより抜粋

展覧会事業を具体的にご紹介します。2021年に行ったのは、SIDE CORE/EVERYDAY HOLIDAY SQUAD (サイドコア/エブリデイ・ホリデイ・スクワッド、※15)の個展「under pressure」です。青函トンネルを取材して立ち上げた展覧会で、コロナ下で換気しないと開場できないといった公共空間の在り方など、アクチュアル(現実的)な状況が表現に反映されています。プレリサーチ段階から住民と会う機会を設けてヒントをもらったり、制作時数多くの学生にも手伝ってもらったりしました。また、アーティストと共に青森市街地に繰り出し、アーティストの視点から街がどう見えるかを体験する「ナイトウォークツアー」を実施し、約20人が参加しました。

AIR事業は、指名型と公募型があります。指名型は、学芸員が独自のリサーチに基づいてアーティストを国内外から招聘し、成果発表をグループ展のような形で行うケースが多いです。2020年には、布を主素材として扱う日本と台湾のアーティスト、碓井ゆいさん、遠藤薫さん、林介文(リン・ジェウウェン/ラパイ・イオン)さんに来てもらい、地域の素材を集めて新しい作品を作った展覧会「いのちの裂け目ー布が描き出す近代、青森から」を開催しました。その一環として、碓井さんの刺繍ワークショップを行ったり、遠藤さんが津軽裂織の伝統工芸士・村上あさ子さんから伝統技術を学んだりという機会も設けました。

もう一方の公募型AIRは、ACACと同じくAIR事業を行う海外団体と、日本人アーティストをエクスチェンジ(交換)する「企画型」と一緒に行うことがあります。毎年秋に開催することが多く、ちょうど今3人のアーティストがACACに滞在中で、まもなくスコットランドからもう1人来る予定です。

公募型AIRの対象は、海外拠点の方2~3人と、日本拠点の方、ほぼ同数のアーティストに重なり合うような時期に滞在してもらいます。展覧会だけでなく、ワークショップや学校プログラム(出前授業など)も行います。

AIR事業を始めて20年以上経ち、アートの在り方、アーティストの働き方も多様になりました。そこで2020年から、公募型AIRの滞在期間を約3ヶ月一律から最短2週間、その後は2週間刻みで最長3ヶ月半まで選べることにしました。どんなジャンルのアーティストでもOKで、キュレーターやリサーチャーの招へいも積極的に実施。過去にブラジルやインドからキュレーターに来ていただいたこともあります。作品や活動の方向性ではなく、レジデンス・プログラムとしての方向性を示すテーマを発信し、アーティストに広く門戸を開きたいと思っています。

コロナ禍の2021年度には、内田聖良さん(※16)の個展《バーチャル供養講》が誕生しました。これは、津軽の独自文化を取材し、地域の人に思い出の品、捨てられない品を提供してもらって立ち上げた作品で、その後、東京でもICC(※17)のグループ展で展示されるなど展開した作品です。2022年度には前田耕平さん(※18)の個展《点る山、麓の座》を開催。津軽金山焼など、地域の文化関係機関を巻き込んでアーティストを支援しました。



スライドより抜粋

ただ、コロナ中は海外アーティストを招けず、レジデンス施設としてのダメージは大きかったと言わざるを得ません。とはいえ、ミーティングや展覧会をヴァーチャルで行うなど、オンラインの可能性を試す機会になりましたし、公募型AIRは今年からオンライン参加も可能という形でこの時の遺産を残そうとしています。

AIRから生まれた作品は、美術館と違ってそのまま収蔵できるわけではないので、アーカイブにも力を入れ、年報とカタログを各1冊作るようにしています。

このように、AIRと展覧会がメインではあるんですけど、芸術文化を担う人材、鑑賞する人材のすそ野を広げる市民交流事業「表現のコモンズ」にも力を入れています。たとえば、冬季にアーティストとじっくり取り組むワークショップ、アートプロジェクト、版画ワークショップ、パフォーミングアーツの公演、リサーチプロジェクトなどがあります。小学生向けの創作体験ワークショップは20年ほど続いており、青森市内の3分の2の小学2年生が参加します。ACACでの体験を持ち帰り、また来てもらえれば…と願っています。

最後に、ACACをめぐる活動をご紹介します。

青森は、札幌や東京に比べると国際交流の機会も限定的と言わざるを得ません。そこでAIRで招へいた海外アーティストの創作プロセスに、市民の方々や青森公立大学の学生さんに積極的に関わっていただき、異文化交流や、国内外アーティストの自由な発想の仕方なども体感してもらいたいと考えています。

そうした中、2001年から続くのが、AIRサポーターズ「AIRS(エアーズ)」です。これは、ACACの運営サポートではなく、滞在アーティストの制作・活動・生活をサポートする団体。アーティストとのネットワークも生まれ、自主的に企画を行うこともあります。メンバーの1人は、2021年に自宅の敷地内を改装し、ギャラリー「gCRADLE(クレイドル)」を始めました。

これからも多くの方に関わっていただきながら、様々な国内外のアーティストとの交流を重視し、関わる人すべてに刺激的な新しい芸術体験の場となることを目指したいと思います。

木ノ下：ありがとうございます。続いて、吉本さんに国内外のアートセンターの事例をプレゼンいただきます。

※10 1941年、大阪生まれの建築家

※11 1958年、東京生まれの彫刻家、版画家

※12 1903-1975。青森県出身の版画家

※13 1914-1988。青森県に生まれ、今純三・恩地孝四郎両氏に師事した版画家

※14 1944-2016。青森県生まれ。国際的に活躍した日本のパフォーマンス・アーティストのパイオニア

※15 SIDE COREは、高須咲恵、松下徹、西広太志により2012年から活動を始めたアートチーム。EVERYDAY HOLIDAY SQUADは2015年度よりSIDE COREと共に活動する匿名アーティスト・グループ

※16 埼玉県生まれ。札幌を拠点に活動するポスト・インターネット時代のベンダー、研究者、作家

※17 NTTインターコミュニケーションセンター(略称:ICC)。1997年東京オペラシティタワーにオープンした、NTT東日本が運営する文化施設

※18 1991年、和歌山県生まれ。大阪を拠点に、人や自然、物事との関係性について実体験を基にしたパフォーマンス、映像、インスタレーション作品を制作

## 典型的スポットから、破天荒な事例まで アートセンター 海外の場合

吉本光宏(以下、吉本)：吉本です。「国内外のアートセンターの事例を」というオーダーですが、実は非常に難しい。なぜなら、アートセンターの定義は明確にないんですね。ですので、私からは、アートセンターというよりも、私が訪問して「alternative art center(オルタナティブ・アートセンター)だと感じた事例」を紹介し、最後に少しだけ、アートセンターを定義することにチャレンジしたいと思います。最初にお断りしますが、これからご紹介する内容は、どれも私が訪問した時の情報でアップデートしていませんので、その点をご確認ください。



私の経験で、古い年代順に紹介します。最初は、東京都江東区の佐賀町エキジビット・スペースです。

小池一子さん(※19)の「日本にはnot-for-profit(非営利)のギャラリーがない。アーティストが作品を作る時間や空間を提供するアーティスト・イン・レジデンスがない」という問題意識から、古い食糧ビルと出会い、おそらく私財も投入されて20年近く活動したスペースです。2002年にクローズしましたが、実績をアーカイブとして残そうとされています。

次は、アメリカ・ニューヨークのKitchen(キッチン)。1970年代初頭、2人のビデオ・アーティストが、使われなくなったホテルの、文字通りキッチンスペースで作品を発表し始めたのが始まりです。様々なアーティストを招いて面白いことを始め、ローリー・アンダーソン、フィリップ・グラス、スティーブ・ライヒ(※20)など、錚々たるアーティストがここで作品を発表し世に出ていきました。

1985年に移転したチェルシー地区の製氷庫の内部は2つのブラック・ボックス形式のスペースに改修されました。ここでKitchenはNPO化し、今も続いています。1990年代のディレクターの話では「アーティストが自然と集まりアーティストを呼んでくる、アーティスト・ラン・スペース(※21)として展開され、伝統はしばしば捨て去られた」そうです。これが、アートセンターの典型例ではないかと思います。

次は、シンガポールのSubstation(サブステーション)。社会主義的とも言える非常に統制の強い国の中で芸術表現を追求し、投獄経験もあるアーティストであるシンガポールを代表する劇作家クオ・パオクンさん(※22)が、政府と交渉し、変電所跡の建物をアートセンターに改修しました。入口すぐに、クオさんのこんな言葉が記されています。

「A worthy failure is more valuable than a mediocre success.」…「価値ある失敗は、ほどほどの成功にも勝る」という意味です。



スライドより抜粋

フランス・ナント市には、Le Lieu Unique(ル・リユー・ユニック)というスペースがあります。「唯一の場所」という意味で、1886年建設のビスケット工場を改修し、2000年に現代アートの実験場としてオープンしました。中には、現代美術のギャラリーや劇場を作りました。

ナント市は、創造都市の文脈でもよく知られています。2005年、当時のヤニック・ガン副市長が東京で開催された文化フォーラムに来られた際、こんなお話をされたのが印象的でした。

「社会が衰退している時に、将来の展望を明るくするものはいったい何か。我々の運命はいったい誰に任せたらいいのか。それはアーティストに任せればいいのか、と我々は考えたわけです」

実際ナント市は、Royle de Luxe(ロワイヤル・ド・リュクス)という大道芸カンパニーに、ナント島の工場跡を提供したことで知られています。この場所で巨大な舞台美術が作られ、中でも有名なのは、象の背中に乗って時を旅するインドのサルタンの冒険ですね。この野外人形劇は世界中をツアーしました。こういうものが生み出される場所こそ、アートセンターではないかと思えます。

中国・北京のFactory #798は、1950年初頭に建設された軍需工場をアートセンターに転用した事例です。スライドの通り、壁に「毛沢東万歳!」と書かれたこの場所でアート作品を発表する活動が始まり、2000年頃からは周辺にギャラリーやアートスペースが集積。「798 Art District(798芸術区)」と呼ばれるエリアが形成されました。日本のギャラリーも進出し、私が視察した時には100名以上が滞在できるような巨大なAIRのスタジオに、なんと日本人も滞在していました。これも、アートセンターができたことによる波及的効果といえます。



イギリス・ゲーツヘッドにあるBaltic Centre for Contemporary Art(バルティックセンター・フォー・コンテンポラリー・アート)は、元製粉工場を現代美術館に転用した事例です。改修でフロアを全部撤去して、巨大な鉄骨で壁を支え、中に巨大なアートワークを設置したのがアニッシュ・カプーアさん(※23)の「TARATANTARA 1999(タラタタラ1999)」という作品です。

ドイツ・ルール地方は、炭坑・鉄鋼で栄えたヨーロッパ最大の重工業地帯でしたが、最盛期を過ぎ、膨大な数の炭坑跡や工場群が残りました。そこで、使われなくなった工場の活用を議論した時、ここで働いた人達の誇りが象徴・集約されているという理由から、多くが産業遺構として残され、アートセンターに転用されました。今では、ルール・トリエンナーレという芸術祭も行われています。スライドのユネスコ世界遺産にも認定された「ツォルフェライン炭鉱」では、バウハウス様式のとてもきれいな工場群がアートセンターやデザインミュージアムに生まれ変わりました。他にも、巨大な倉庫跡もそのまま残され、過去には池田亮司さん(※24)のインスタレーション展示も行われたというところもあります。100m以上もある床の上に彼の作品が展示されたらと聞くと、想像するだけでワクワクしますね。配管などがむき出しの工場跡の空間も劇場に転用され、演出家のロメオ・カステルッチさん(※25)が新作を作り、発表する場となっています。



スライドより抜粋

オランダのアムステルダムには、NDSMというアーティスト・ラン・スペースがあります。元造船所をアーティスト・グループが不法占拠し、市と交渉してコンペで勝ち取り、中に100名以上のアーティストやクリエイターが滞在するスタジオができた事例です。私は2008年に初めて行ったのですが、6年後の2014年に行くとき周辺が開発されていました。スライドの写真、クレーンの中に箱が見えますが、これはなんと、ホテルなんです。クリエイター

が作ったのですが、市の許可が下りず、まだ営業できていないという(笑)、そんな破天荒な事例です。

AIRの事例でもう1つ。ドイツ・シュトゥットガルトにあるAkademie Schloss Solitude(アカデミー・シュロス・ソリテュード)です。18世紀半ばに建造された城跡をレジデンス施設に改修した、規模が大きくヨーロッパで最も人気のAIRです。この特徴は、アーティストだけではなく、科学やビジネスなど異業種の方もレジデンス対象になる点です。

私が文化庁の調査で訪れた時は、レイナード・ヒュームさんという、南アフリカ生まれの法律家が滞在されていました。この方はチェスのプレイヤーでもあり、「法律での言語とチェスの駒の動きに共通性があるように、音楽、デザイン、建築にも、構成要素の機能や相関関係から意味を見出すことができる」と話されていました。また、「アーティストと共に過ごすことで弁護士としてのキャリアについて深く考えさせられた」「法律の原理が、芸術や他の分野の原理とどのように違うのかという問題意識を高めることができた」とも。異分野の方がアーティストと出会うことで思考が活発化する、そんな場所になっています。

海外最後の事例は、ロシア・モスクワです。2016年に訪問した際、「モスクワにもこんなところがあるんだ!」と驚いたのが、Garage Museum of Contemporary Art(ガレージ・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート)。ロシアの石油王アレクサンドル・ジュコフさんの娘ダーシャ・ジュコワさんらが、元バス車庫をアートセンターに転用して始めました。建築家レム・コールハース率いるOMAが設計を担当したそうです。私が参加した国際会議で、モスクワのアーティストによるプレゼンがあったのですが、これが大変衝撃的で…全裸になって電柱からぶら下がるようなパフォーマンスを行うアーティストでした。

レセプションの後、そのアーティストの作品を展示するギャラリーにも行きました。車でモスクワの中心部から1時間近く離れた場所で、怪しい雰囲気が漂いますが(笑)、モスクワでも新しい芸術を表現する動きがあり、それを支える仕組みがあるのだと知りました。

時間が足りないので、国内の事例は急ぎ足でご紹介します。神戸のCAP HOUSE(キャップハウス)、BankART(バンカート)、東京の3331 Arts Chiyoda(アーツ千代田)…ここは2023年3月に閉館してしまいましたが。また、神戸のKIIITO(キイト)、クリエイティブセンター大阪といったような場所も、私が訪問してアートセンターではないかと考えた事例です。

※19 1936年、東京生まれのクリエイティブ・ディレクター、コピーライター

※20 ローリー・アンダーソンはアメリカの前衛芸術家、作曲家、音楽家、映画監督。フィリップ・グラスはミニマル・ミュージックの旗手として知られるアメリカの現代音楽の巨匠。スティーブ・ライヒはミニマル・ミュージックを代表するアメリカの作曲家

※21 アーティスト自身の手によって運営されるアート・スペースのこと

※22 1939-2002。アジアを代表する劇作家。2000年には新国立劇場で作品が上演された。

※23 1954年、インド生まれで英国を拠点に現在国際的にも最も注目される現代美術家の一人。

※24 1966年、岐阜県生まれ。フランスで活動する日本の電子音楽・実験音楽のミュージシャン、現代美術作家

※25 1960年、イタリア生まれの演出家、美術家

## 吉本さんが6つの観点で定義した アートセンター(のようなこと)

吉本：最後に、アートセンターの定義(のようなこと)をしてみます。…カッコ付けで、言い訳のようなことを加えましたが、とにかくチャレンジしてみます。

アートセンターの資質とは何か。

1つ目に、not-for-profitを挙げます。ここで重要なのは、non-profitではない点です。アートセンターも事業やビジネスで利益を追求するけれども、それは営利追求のためにやるのではない、という意味で、not-for-profitです。



2つ目は、alternative。これは、既存の美術館や文化施設と違う「もう1つの」という意味。スペース自体もそうですし、そこで行われる表現も従来とは違うものを追求するという意味で、alternative。

3つ目は、creation > exhibition, performance, creative artists > interpretive artists。

これは、クリエイティブなことを非常に重視するということ。先ほどプレゼンされた3施設でもそうしたコンセプトが提示されましたけれど、作品を展示・公演することより、作品が生まれることを重視する。アーティストは、英語でcreative artistsとinterpretive artistsと分けることがあります。前者は、美術家や作曲家など、個人で新しい作品を生み出す人。後者は、演奏家や俳優、ダンサーなど、既存の作品を解釈して表現する人。アートセンターは、どちらかというところ前者、creative artistsの拠点になる場所ではないでしょうか。

4つ目は、open-end > goal-oriented。

最初に目標を掲げ、それを達成するために活動するのではなく、とにかくやってみて色々な成果が出る。そのことの方が大きな成果に結びつく、というマインドで活動するのが、アートセンターではないか。

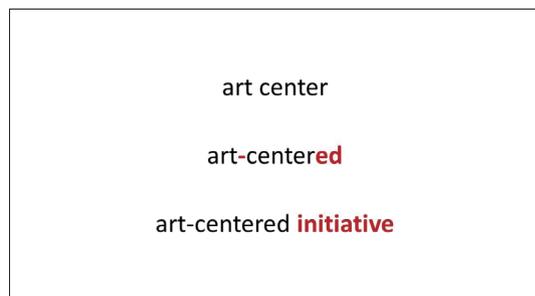
5つ目は、easygoing > strategic。

なりゆきに任せる、というのでしょうか。「戦略を立てて取り組む」というより、「とりあえず始めてみよう」ということから、新しいものが生まれてくる。

6つ目は、risk-taking > risk-hedging。

積極的にリスクを取り、新しいことを生み出していこうというのが、アートセンターではないかと思えます。

art centerは「センター」とついているので、場所や建物をイメージするかもしれませんが、でも、少し英語を工夫して、artにハイフンを入れ、最後に「ed」をつけてart-centered、そしてcenterを新たな活動を立ち上げるというinitiativeに置き換えて、art-centered initiativeとした方がより明確になる。つまり、芸術的な価値を中心に置いて、様々な活動、動きを立ち上げていくのが、アートセンターではないかと思えます。



スライドより抜粋

## 運営スタイル、市民との距離感… 日本と海外の違いを考える

木ノ下：吉本さんに、国内外のアートセンターの事例をレクチャーいただきました。示唆に富んだアートセンター6つの定義、いかがだったでしょうか。これまでの情報でもう満腹かもしれませんけれど(笑)、今日はSCARTSの誕生日パーティーということで、皆さんからコメントのプレゼント、お知恵を拝借できればと思います。早速、ご来場の方から運営母体についてのご質問をいただいています。海外のアートセンターは、公共ではなく民間が運営しているケースが多いようです。吉本さん、インスティテュションに関する違いについて、いかがでしょうか。



吉本：はい。それは、今日の企画を拝見した時から私も認識しています。日本のアートセンターは、行政の公的なお金が入って運営されていますが、海外にも同じ事例があるかと問われると…はっきり申し上げて、存じ上げません。佐賀町のエキジビット・スペースも含め、私が今日ご紹介した事例は、基本的に民間が運営しています。建物や運営に行政の資金が入っている可能性はあっても、イニシアチブは民間。その多くは、公的な美術館などに対するある種のアンチテーゼ、違う価値観を示すこと、そこでは許容されないような新しい作品を生み出すことが、アートセンターとしてのモチベーションやエンジンになっているというのが、私の印象です。

木ノ下：運営課題を含め、各館の皆さんからひと言ずつ、いただけますか。

甲斐：せんだいメディアテークは仙台市の生涯学習施設なので、もちろん市のお金で運営しています。…逆に、吉本さんに質問したいのですが、NDSMやゲーツヘッドなど、紹介されたところはアーティスト・イニシアティブで動いているということですが、財政面は寄付や助成金でしょうか？ 僕は、人件費も使えるような事業助成があると聞いていますが、その辺りについてお教えいただけますか。

吉本：すべてのアートセンターの状況を把握しているわけではありませんが、たとえばバルティック(イギリス・ゲーツヘッド)なんかは、行政のお金が入っています。一方、ニューヨークのキチンはNPOが運営し、民間の寄付が圧倒的に多いと思います。ただ、公的資金も入っているのではないのでしょうか。全米芸術基金やニューヨーク州のアーツカウンシル(※26)ですね。甲斐さんのおっしゃるように、事業ではなく、人件費にも使えるゼネラル・オペレーティング・サポートという公的な資金の流れがあります。先ほどご紹介した施設に公的資金が入った場合は、そうした資金が使われていると考えてよいと思います。

甲斐：なるほど。あと、立場に関して全然違うなと感じた点は、せんだいメディアテークの場合、博物館法などに基づいていないので、背景は1つの条例でしかないんです。ですから僕は、仙台市の施策に沿って仕事することになるわけです。予算を獲得し、使うにしても、生涯学習施設として「学びのデザインをするのだ」という立場でアートを扱います。税金と施策はセットで、そこ常にも議論し、もみながら実現していく立場です。

芦立：秋田市文化創造館を運営するのは、NPO法人アーツセンターあきたという団体です。秋田公立美術大学は、今年短期大学から4年制に移行して10周年を迎える大学なんですけれど、そこの社会連携事業を担う学外法人として設立された組織です。美大のクリエイティビティをどう社会につなげていけるか、ということを目指しており、理事長は藤浩志さん(※7)。「すべての人がクリエイティブである」ということを謳っています。

運営費は秋田市の税金が主ですが、貸館収入を企画の支出として割り当てています。とはいえ、それは年間事業予算のうち6%程度。50%程度は人件費に充てています。というのも、コーディネーターが20人ほどいるんですね、パートタイムや経理・総務、施設管理も含めて。それだけ知見、専門性があると捉え、コーディネーターがいるから成り立っているという状況ですが、まだまだ効果的なあり方を検討する必要があると感じています。

慶野：ACACの場合、2001年の開設時は青森市の文化政策の中心事業でした。国際的に有名なアーティストを呼ぶための資金をきちんと確保し、国内外の専門家に関わっていただきながら、AIR事業のプログラムを練り上げていった経緯があります。2009年に青森公立大学と一緒にになり、市の芸術文化政策からは距離が生まれました。ただ、青森公立大学には芸術系の学部も現代美術やアートマネジメントに近い教員もいないので、活用しきれているとは言い難い。予算に関しては、青森市から運営費が交付されており、ACACの年間予算は1%シーリングがかかりつつも確保されてきました。交付される予算は目減りしますが、文化庁助成金を獲得するなど自助努力もしてはいます。今思えば、市の文化政策が変化する中でAIRを安定的に運営できたのは、公立大学に移ったからとも考えられます。



木ノ下：アートセンターについて「税金を使う正当性を求められるのが宿命」と書いていただいた来場者の方もいました。キュレーションや芸術観とは別に、予算など色々と制約がある中、吉本さん、望ましい事例はあるのでしょうか。

吉本：3人のお話で感じたのは、市民との距離が近く、市民に何かを提供しようと熱心に取り組まれていること。税金が入っているから当然なのかもしれませんが、海外の事例と比べて違うように見受けました。日本と海外では芸術の立ち位置が違うというか…海外ではアーティストがいることに対する社会的コンセンサスがあって、だからこそ、今日ご紹介したような海外の施設は成立している気がします。一方、日本を振り返った時、アートの存在が市民にどう受け取られているかが、かなり違う。日本のアートセンターは、「アートはこういうものだ」ということを理解してもらい、アプローチすることが、とても大切なのだろうと感じました。

※26 New York State Council on the Arts: 芸術の振興を目的にNY州内のアートNPOなどに助成を行う独立機関

## 事業評価をどうするか？ 仙台、秋田、青森の取り組み

木ノ下：ニューヨーク・キチンのように、アートセンターは様々な人が育つ、表現を活性化させるためにあるといえますが…創ることのプロセスをどう見せていくかについては、なかなか難しい。市民に何を還元するかが主眼に置かれているのが、日本のアートセンターの特色かもしれません。そういう面に関して困難なこと、たとえば、評価の問題などはいかがでしょう。

甲斐：僕はもともと大阪でNPO活動に従事し、今も続けているので、そうしたインディペンデント感覚は欧米の事例なんかに近いのですが…。振り返ると、2010年にせんだいメディアテークに来た時、担当者から「教育局に残ると、文化振興に移ると、どちらに行きますか？」と聞かれたんですね(笑)。というのも、90年代か

ら2000年代にかけて、美術館が文化振興、観光振興につなげていく流れがあり、そういうタイミングが来ていたんですね。でも、僕は大阪の経験から「教育にある方がいいです」と答えました。それは、予算が小さくなくても、きっちりやれるから。文化振興だと、動員という話に絶対なってくるんですね。それで、今に至ります。

教育面から考えると、指標は作りにくく、数値化しにくい。そこで、先ほど挙げた「アートノード」の場合、

アドバイザーを立て、ミーティングを行い、アートノードのプログラムを振り返る「3年目のメンテナンス」「8年目の健康診断」というイベントを行っています。「これまでこんなことしてきましたけど、どうでしょうね?」と問い掛け、「もっとこうした方がいいんじゃないか?」など意見をいただく。それを次年度の事業に反映させていく取り組みです。



芦立：秋田市文化創造館は、「分かりにくい」ことをポジティブに捉えている施設です。あえてロゴマークを作っていなかったり、フォントもヒラギノ角ゴシックというベーシックなものを採用したり。施設のあだ名もありません。それは、市民の方たちが勝手に色々関わってくれる状況を生み出せたらという考えから。でも、ある程度の言語化は必要なので、県内外の有識者でつくる外部評価委員を設けています。文化事業評価の専門家である大澤寅雄さんに数値的なものをチェックいただいたり、客観的なヒアリングを通して事業の良し悪しを見出していると思います。

慶野：ACACは、アーティストに来てもらい、制作プロセスに多くの市民や学生さんに関わってもらうことを重要視していますし、関わった方々が新たな活動を起こす機会が作れた時、ACACの施設を利用するという流れを作っていけたらと思っています。ただ、申し上げたようにスタッフはインスティテューションとして成立するギリギリの人数で設計され、複数名のアーティストを受け入れた時には地域住民によるサポートがないと大変です。ハードですが、だからこそプロセスに自然と関わってもらえるし、事実、回していけるという現状です。

評価に関しては、公立大に移管したので青森市からはそれほど問われませんが、毎年数値的な報告をしています。また、パブリケーションなどのアーカイブで活動を残し、後から誰でも活動を振り返り、検証することができることも心掛けています。そして次年度、そして未来に向けて何をすればいいのか、学芸チームとして独自目標を掲げ、自己評価を行い、チームで意識を共有することを心掛けています。もちろん本当は、ディレクターのような方がいるほうが良いのかもしれませんが、大学との関係性もありますし、その方向に向けていくことができたらと思っています。

## ささやかなエピソードを発信して 行政がアートセンターを作る意義

木ノ下：吉本さん、行政との密接な関わりが日本型アートセンターの有り様だといえますが、事業評価に関して、何かヒントはございますか。

吉本：はい…芸術文化施設の事業と評価は“永遠の課題”。私も前職のニッセイ基礎研究所で色々なりサーチを行いました。8割方は評価絡みで、正直申し上げて、うんざりしています(苦笑)。でも、皆さんの悩みの種であり、税金を使う以上やらないわけにはいきません。ですから、まずは説明する努力を、とにかく積み重ねるしかないと思います。

数値的な指標を編み出すことは本当に難しい。けれど、編み出す努力はしながら、それとは別に、エピソード、たとえば「アートセンターのイベントに参加した子どもが、すごく変化した」というようなエピソードが山のように起こっているはず。そういうエピソードを一生懸命集めて、「だから芸術というものが重要なんだ」ということを訴えていくことが肝心だと思います。一種のアドボカシー活動(※27)ですね。

それと、今日感じたのは、地方公共団体がアートセンターを作ることを意味、ポテンシャルについてです。SCARTSの計画が発表された時、僕は「札幌市はアートセンターを作るんだ」と強い印象を受けました。そこから勝手に読み取ったのは、おそらく札幌市は既存の美術館やKitaraのようなコンサートホール、新しい劇場(hitaru)も作るのだけれど、そこからこぼれ落ちていくものがあるから、アートセンターで扱おうとされているんだらうな、ということ。すごいな!と感じました。それが5年経ち、色々悩みがあるらしいと伺っていて、それが今日の催しにもつながっていると思うのですが(笑)。



それからもう一つ、アートセンターは分かりにくいわけです。そうした分からないもの、理解しがたいものにも価値があることを役所が認め、市民向けのアートセンターを運営することの意味です。今の時代、何でも評価が求められる、成果が見えないと説明が求められる息苦しい世の中で、たとえ予算の規模は小さくても、そういうものが大切だという市民へのメッセージになるわけです。役所内部に対しても、意味があるということを常に問い続けなければなりません。今日この場にいらっしゃる皆さんは、実際ずっと説明しているわけですね。アートセンターを公的機関がやることはとても大切だと感じました。

※27 権利擁護や課題解決のために、影響力を持つ組織や個人に提言し、訴えて共感の輪を広げること

## 施設を使いこなそう! 「分からない」をポジティブに

木ノ下: 来場者の方から「地元出身じゃない地域外から来ている面白さ、可能性について気になる」というコメントもいただきました。その辺を含め、SCARTSに対して何かもうひと言、プレゼントをいただけたら嬉しいです。

甲斐: 大阪でのNPO活動を踏まえると、僕は、外側の人間がこういう施設を“道具”としてどのように使いこなせるか、実は市民側の問題ではと思います。もっとファイティングポーズいるんちゃうの?とか(笑)。でも、施設側の人間として言うと、めっちゃルール多いんですよ!(笑) 難しいこともいっぱいある。だから、現場の人間はぎゅうぎゅうして、萎縮しているし、外にも出にくい。たとえば、この人



にOKを出したら、別の人から「なんでこっちは駄目なの!」みたいなことが起きてくる。説明責任があるので困難ではあるんです。でも、丁寧に話し合い、意味を確認し、言葉を整えてアクションすることが大事です。…無理してこの道具を壊すわけにもいけないので(笑)。というわけで、「道具を使いこなす」という外側の頭が、もっといるんちゃうかな…とったりしています。

芦立：確かに、秋田市文化創造館もルールに縛られること、多いです。利用が増え、色々な団体さんが交わる状況になると、「ルールを守ってね」とつい言いたくなるんですけど、そこは堪え、「うちはこういうスタンスです。あなた達はどうします?」と問い掛け、自律性を求めるようにしています。そこで「それは無理!」となってしまうこともあります。新しい可能性を感じ、面白がってくれるなら、「一緒にやりましょう!」と発展します。SCARTSも、ビルの中ということで多分ルールがあると思うんですけど(笑)、どう共存していけるか、違う側面から見直してみると面白い糸口、切り口があるかもしれません。

繰り返しになりますが、「分かりにくい」ことを敬遠するのではなく、何か新しいものが生まれるチャンスと捉え、どうしたらいいのかを考え、なぜやりたいのかを問い掛けることが必要だと思います。「分かりにくい」をポジティブに捉えてみてください!

慶野：ACACも20年以上続けていますが、「分かりにくい」「知らない」「行ったことない」とよく言われます(苦笑)。実際に来てもらえると、環境の良さを実感していただけるのですが…。インスティテューションとしては、私たちの目指すこと、どういうアーティストを求めているのかについて、主催事業を中心に、国内外に広く発信することが重要だと感じています。あと、ACACは山の中にあるので、来れない方々にどう見てもらうかという点は課題です。SCARTSに久しぶりに来て、常に色々な人がいる場所だと改めて感じました。たとえば、バレエの練習に来た小・中学生が現代美術に出会っちゃう。そうした偶発性を起こす場所として、これからも応援しています。



吉本：SCARTSには、とにかく事業をやり続けてほしい。その時に3つのミッション——「一人ひとりの創造性をささえる」「あたらしい表現の可能性をひらく」「すべての人に開かれたアートとの出会いをつくる」——これ、すごく良くできてると思います。このミッションを信じて、とにかくやり続けてほしいです。

話は逸れますが、先ほど創造都市の話をしました。その提唱者チャールズ・ランドリーさん(※28)から去年久しぶりに連絡があったんですが、彼が今、力を入れているのが、ドイツ・ベルリンで開催されている「The Creative Bureaucracy Festival(クリエイティブ・ビューロクラシー・フェスティバル)」(※29)だそうです。Bureaucracy、つまり官僚主義とCreativeの組み合わせ、すごく面白いなと思いました。

よく考えてみると、ファッション、デザインなどの産業の世界にクリエイティビティが求められると言われたのがもう20年以上も前のこと。今やクリエイティブエコノミーという言葉が定着し、産業分野に関係なく、経済全体にクリエイティビティが必要だとされています。同じように行政機関も、これだけ社会課題が複雑化する中、もちろん基本を支える従来の行政サービスも必要ですが、それ以上にクリエイティブな発想で社会課題に向き合っていないと、市民サービスが提供できない時代になってきていると思うんです。

というわけで、SCARTSには、札幌市のCreative Bureaucracyの先頭に立つ!ぐらいの気持ちで進んでいただきたい。…だいたい、先頭に立つと叩かれるわけですよ、「分かりにくい」とかね(笑)。叩かれても大丈夫なように、木ノ下さんが来たんだと思うので(笑)、そうした反応も誇りと受け止め、とにかく事業をどんどんやり続けるSCARTSであってほしいです。

木ノ下：(笑)SCARTSの松本さん、いかがですか?

松本：(笑)ありがとうございます。「ささえる」「ひらく」「出会いをつくる」という3つのミッションに基づき、まったく異なる機能がここには備わっており、事業はどうしても多様化しますし、我々スタッフも幅広い対応が求められてきます。専門的スキルを持つスタッフと、スタッフだけで解決できないことは外に協力を求めつつ、吉本さんがおっしゃったように、SCARTSという場所が、札幌の拠点として活動していける方法をこれからも模索していきたい、皆様のあらゆる活動を日常的にサポートできるような場所でありたいと思います。そのためには、些細なことでも相談してもらえよう、私たちも心を開いて、皆様をお迎えしたい。これからも応援していただけるような施設として、頑張っていきたいと思います。

甲斐：すみませんが、一つだけ。心を開くと、結構傷つくんですよ(会場、笑い)。傷つくと疲れて、病むんですよ…本当に難しい仕事だと思います。できればお互いが刺さらないよう、ウィンウインの関係に、中も外もなるといいなと思います。

木ノ下：ありがとうございます。先ほど話題にあがった評価のことは、絶え間なくやるしかないと思います。私もアートセンターに関わり、「これが正解」という答えがあったら、アートセンター自体いらないのでは…とも感じます。むしろ、あるからこそ、アートが社会に求められていることの証といえるのではないのでしょうか。今日は、その多様な在り方を伺いました。冒頭に申し上げた通り、アートセンターは、博物館法に基づく美術館、劇場法に基づく劇場のような法律がありません。法律に基づくルールがないことが、ある種の権利・自由であり、福祉の観点から言っても、アートは人間の心や想像力を高める。吉本さんもおっしゃったように、「そういうことですよ」と、言い続けるしかないのかなと、勇気をもらいました。5歳のSCARTSがこれから立っていけるような、大変豊かなコメントのプレゼントを、登壇者の方々、そしてお客様からもたくさんいただきました。これで、SCARTSの開館5周年記念事業、北日本アートセンターミーティングを終了します。ありがとうございました。

- ※28 創造都市(クリエイティブ・シティ)を1995年に提唱し、都市の未来と再活性化において文化を創造的に利用することを提唱した国際的な権威。2004年にユネスコが採用した「創造都市ネットワーク」(※4)は、チャールズ・ランドリーの発表をもとにしたプロジェクト
- ※29 公的機関の改革を促す国際的フェスティバル。キーワードは「no because(だからできない)」から「yes if(だったらできる)」への転換。2023年は6月にベルリンで開催。世界各国の行政組織や政治団体、公共団体等から1,300名以上が参加し、優れた取り組みが共有、賞賛された



## 登壇者プロフィール



芦立さやか (秋田市文化創造館 ディレクター)

北海道生まれ、武蔵野美術大学芸術文化学科卒業。BankART1929(横浜)、東山アーティスト・ブレイスメント・サービス実行委員会(現:一般社団法人HAPS)等、さまざまな文化施設や団体に勤務したほか、フリーランスで展覧会制作やアーティストのマネージメント等に従事。2010年、アーティスト・イン・レジデンスのコーディネートを行うResidency Unlimited(NY)に文化庁新進芸術家海外研修制度派遣で参画。2021年より秋田市文化創造館に勤務し、2022年より現職。



甲斐賢治 (せんだいメディアテーク アーティスティック・ディレクター)

大阪生まれ。主に地方行政の文化施策に従事、企画、運営に携わるとともに、アートやメディアにまつわる複数のNPOに所属。「個人がメディアを活用し、自ら、環境を作り出す力の創出」や、「地域文化の地産地消サイクルの起動」を目指し、社会活動としてのアート、メディア実践に取り組んできた。2010年春より、せんだいメディアテークに所属。2011年、東日本大震災を受け市民参加・協働型の「3がつ11にちをわすれないためにセンター」や「考えるテーブル」などを展開。2016年より、さらにメディアテークの機能をまちに拡張し「アーティストのユニークな視点と仕事を地域の人材、資源、課題」につなぐ新事業「アートノード」に取り組む。2011年度芸術選奨・芸術振興部門文部科学大臣新人賞受賞。



慶野結香 (公立大学法人青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC] 学芸員)

1989年生まれ、東京大学大学院学際情報学府修士課程修了。秋田公立美術大学、サモア国立博物館(Museum of Samoa)での勤務を経て、2019年より現職。キュレーションの方法論として、滞在制作およびAIR(アーティスト・イン・レジデンス)に関心を持つ。アジア・パシフィック地域における、布をはじめとした文化のリサーチを行いながら、アーティストと協働し近現代史を再考する企画を多く手がける。近年の主な企画に、「いのちの裂け目一布が描き出す近代、青森から」(2020)、SIDE CORE/EVERYDAY HOLIDAY SQUAD 個展「under pressure」(2021)、「余の光 / Light of My World」(堤拓也 / 山中suplex)との共同キュレーション、ALTERNATIVE KYOTO in 福知山、2021)、小田原のどか個展「近代を彫刻 / 超克する一雪国青森編」(2021-22)、「大川亮コレクション—生命を打込む表現」(2021-22)、「発現する布—オセアニアの造形と福本繁樹 / 福本潮子」(2023)など。



吉本光宏 (合同会社文化commons研究所 代表)

1983年、早稲田大学大学院(都市計画)修了後、黒川玲建築設計事務所、社会工学研究所、ニッセイ基礎研究所を経て、2023年6月に文化commons研究所代表・研究統括に就任。文化政策や文化施設の運営・評価、創造都市などの調査研究に取り組むほか、国立新美術館や東京オペラシティ、東京国際フォーラムなどの文化施設開発、アート計画のコンサルタントとしても活躍。文化審議会委員、東京芸術文化評議会評議員、(公社)企業メセナ協議会理事などを歴任。